

菅谷館・菅谷城理解のために

— 文献史学の視点からの再検討 —

加藤 光男

はじめに

本稿は、嵐山史跡の博物館における令和2年度企画展「戦国の比企 境目の城」を開催するにあたり、改めて菅谷館・菅谷城に関する文献・絵図等を確認し、得られた知見を紹介するものである。菅谷館・菅谷城に関する言及は多数におよぶが、基本文献は次のとおりである。

江戸幕府が編纂した『新編武蔵風土記稿』⁽¹⁾、大正期に県指定史跡とする際の調査報告⁽²⁾、埼玉県立歴史資料館を建設する際の発掘調査報告書⁽³⁾、収集した関係資料(城絵図・歴史史料)をまとめて提示した小野論文⁽⁴⁾、考古学の視点から考察した水口・栗岡共著論文⁽⁵⁾、嵐山史跡の博物館企画展「遺物が語る中世の館と城」開催時の図録⁽⁶⁾、元埼玉県立歴史資料館館長の梅沢太久夫著書⁽⁷⁾など。

なお、本稿は、結論だけではなく考察過程も合わせて記し、今後の調査研究の俎上となることを念頭に置いて記述していることをあらかじめ断っておく。史料を引用する際には、断らない限り読み下し文にしているので、原文にあたる場合は註を参照していただきたい。

1 史跡の地理的・地政学的環境

菅谷館跡と菅谷城跡(この両方を含む場合は、以下、史跡と略称表記する)は、都幾川を臨む台地の縁辺部に築かれている。史跡の南側は都幾川の浸食によってできた崖となっており、史跡のある台地上と台地の裾との高低差(比高)は約20mある。また、東側と西側の2方向は深い浸食谷が入っている。このように東西南の3方は、自然地形を利用し、巧みに防御態勢を整えている。これに対し、北側は地続きの浅い窪地であり、江戸時代以降は田地となっていた⁽⁸⁾。この田地は、史跡の東から北西に延びており、この方角の防御を固めるため、かつては泥田堀であった可能性がある。菅谷城跡側からみて、この泥田堀の外側に鎌倉街道上道が通っていたと推定される⁽⁸⁾。この鎌倉街道上道の道筋は、明治12年(1879)3月日の日付を記した、菅谷村戸長の根岸與兵衛の署名のある「畠山重忠之城跡現今之図」⁽⁹⁾をもとに判断すると、現在の国立女性教育会館の敷地内を縦断し、菅谷中学校の東側を通っている。

現在では、三ノ郭の北側に接して国道254号線嵐山バイパス道が通っているが、この道は昭和52年(1977)に開通したものであり、それ以前に道はなかった⁽⁸⁾。江戸時代に作成された菅谷村の村絵図は確認されていないが、享和元年から2年(1801~02)に作成された『武蔵志』に掲載された「菅谷古館」⁽¹⁰⁾には三ノ郭の北側に隣接した道は描かれていない。また前述の「畠山重忠之城跡現今之図」⁽⁹⁾には、現在の菅谷小学校と菅谷中学校の間から大妻嵐山高等学校へ向かう道など史跡周辺の道は記されているが、現在のバイパス道の道筋にあたる箇所には道は記されていない。このことから、傍証にすぎないが館や城が機能していた時期、史跡の北側に隣接する幹線道路はなかったものと推察される。

次に、菅谷館・菅谷城の地政学的環境についてみておこう。

史跡の南を流れる都幾川は、史跡の近くで槻川と合流している⁽⁸⁾。このことは、城郭絵図集『城築規範』(寛文12年(1672)に編纂)所収の現存最古の菅谷城絵図「武州菅谷城」⁽¹¹⁾でも同様である。『城築規範』は、千田嘉博によれば「17世紀半ばに尾張藩は尾張国内の主要な城跡について絵図群を作成しました。これらは軍学系の城絵図とは異なり、城跡の現状を土地利用も含めて正確に測量調査したもので、近世初頭の城絵図の中でも白眉とってよいものです。」と評価⁽¹²⁾されている。

遅くとも平安時代末期以降、槻川と都幾川の合流点付近には物資の集散を行った舟着場があったと推察される。前述した「武州菅谷城」⁽¹¹⁾の城絵図に、都幾川と史跡の間に「フチ」と明記された水場がある。現在この場所は嵐山町の管理のもと「ホタルの里」の名称でホタルを育てているが、この場所が舟着場であったのではないかと私は考えている。

史跡から都幾川を隔てた対岸の嵐山町大蔵では、都幾川の河段丘上にある耕地の圃場整備を行うため、嵐山町によって発掘調査が行われた⁽¹³⁾。その結果、12世紀後半から14世紀にかけての集落跡が発見されている。この遺跡は、東西約350m、南北200mほどの大きな集落跡であり、遺跡の中は溝で区画され、多くの建物跡や井戸跡、墓坑などが確認された。また、中国渡来の陶磁器や東海地方から運ばれた国産の陶磁器、和鏡が出土した。通常の村落遺跡から出土することのない前述の遺物が発見されたことから、この遺跡は、単なる集落ではなく、物流の中継地点の性格をもった集落であったのではないかと発掘報告書等で評価されている。このように、川の合流点に隣接している史跡の立地は、河川流通や交通を掌握するのに都合のよい場所であった。なお、畠山氏のルーツである秩父平氏が、その本拠である秩父盆地から分家を創出していく過程は、荒川、入間川などの河川に沿って展開されていたことが指摘⁽¹⁴⁾されている。

また、史跡の東側は、中世の幹線道路である鎌倉街道上道に面していた⁽⁹⁾。

以上のことから、史跡のある場所は、河川および陸上における物資の輸送や人々の通行を監視、押さえるのに都合の良い場所であり、要衝に位置していたことがわかる。

菅谷館跡の北西約1.5kmの場所に平澤寺^{へいたくじ}(嵐山町平沢1070付近)がある。この寺院の旧境内にあたる長者塚と呼ばれていた古塚を、享保年間(1716～36年)に掘ったところ久安4年(1148)銘の刻まれた鑄銅経筒⁽¹⁵⁾が発見されている。銘文にある「平朝臣茲繩」は、畠山重忠の曾祖父である秩父(平)重綱であるといわれている。祖先または自身の死後の平穩を願って埋葬する経筒を他領主の支配地にある寺院に埋葬することは考えにくいことから、菅谷の北側に隣接する平沢の地は重忠の3代前の重綱の時代には重綱の支配下にあったと推察される。なお、畠山の姓を名乗るのは重忠の父の重能からであることから、重能の時に男衾郡畠山(深谷市畠山：荒川に隣接)を本拠とし、畠山館^{はたけやまのたち}に居住したといわれている。

一方、菅谷館跡から都幾川を挟んで南東約1kmには大蔵館跡がある。大蔵館には仁平3年(1153)以降、帯刀先生^{たちきせんじょう}に任じられていたことのある源義賢(生誕年不詳～1155年没)が居住していた。義賢は、兄の源義朝が下野守に任じられた頃に、上野国多胡庄に下向したという。武蔵国留守所惣検校職を帯びる武蔵国内最大勢力の秩父重隆(秩父重綱の次男・秩父平氏の一族で家督・河越氏の祖)は、この源義賢を推戴することにより、対立していた源義平と対抗しようとした。こうして義賢は、秩父重隆の「養君」となり、重隆の娘を娶り大蔵館に居住したのであった。なおこの時、秩父平氏一族内においては、その家督権である武蔵国留守所惣検校職をめぐ

り、畠山重能(重忠の父)は叔父の秩父重隆と対立していたこともあって、畠山重能は源義平と手を結ぶ⁽¹⁶⁾。久寿2年(1155)8月16日、義平率いる軍勢が大蔵館を襲い、源義賢・秩父重隆は共に討たれた。この時、大蔵館にいた義賢の遺児・駒王丸は、畠山重能や斎藤実盛らの計らいによって信濃木曾谷(長野県木曾町)の中原兼遠に預けられ、のちの源義仲(木曾義仲)となる。

源義賢・秩父重隆の死去後、大蔵館および大蔵の地の動向を示す史料は確認されていないが、大蔵合戦の勝者、つまり源義平もしくは畠山重能の手に渡ったものと考えられよう。重能の支配下におかれたとすると、都幾川・槻川に関する河川運輸・交通は、この時点で畠山氏が掌握したといってもよい。なお、秩父平氏の族長権は、大蔵合戦の後、重能に移ったという⁽¹⁷⁾。そして長寛2年(1164)、この重能と三浦義明の娘の間に重忠が生まれたのである。このように、菅谷館跡のある場所は、平安時代末期には、都幾川を挟んで、北に秩父平氏の系譜を引く畠山氏、南に秩父平氏族長の重隆の娘と婚姻した河内源氏の源義賢という二つの勢力が隣接し対立していた境目の地であった。このため、菅谷館跡の場所は、大蔵合戦時には畠山氏による対源義賢・秩父重隆のための何らかの施設があった可能性がある。

鎌倉時代中期以降から戦国時代以前までの状況はわかっていない。

天文15年(1546)の河越夜戦^{よいくさ}が行われる以前の戦国時代前期、北武蔵地域(現在の埼玉県域)は、扇谷上杉氏が河越城(川越市)に、山内上杉氏が鉢形城(寄居町)に拠点を構え、対立していた(享徳の乱:1487~1505年)。両上杉氏の勢力の境界は、扇谷上杉氏の前線拠点となった松山城(吉見町)と山内上杉氏の前線拠点であったと思われる須賀谷(菅谷)城(嵐山町)を結ぶ境界線上にあったとされる(余談だが、この松山城と須賀谷(菅谷)城との間に杉山城がある)。須賀谷(菅谷)城に隣接する須賀谷原では長享2年(1488)に両上杉軍による戦が行われている。この合戦の頃に、後述するように須賀谷旧城が再興されたと推察される。

このように、菅谷館^{すがやのたち}も須賀谷城も勢力の境目に築かれていたことが確認される。

2 菅谷館・須賀谷(菅谷)城の歴史

菅谷館・須賀谷城に関して、築造および廃絶した期日を明記した史料は確認されていない。

(1)平安時代末期から鎌倉時代初頭の菅谷館

嵐山町川島1898に鎮座する鬼鎮神社に、「寿永元年(1182)に坂東平氏の一派である畠山重忠公が菅谷城を築城するに当たり、鬼門除けとして当社は奉斎された」⁽¹⁸⁾という伝承があるが、それを裏付ける史料はない。まずここで問題になるのは、平安時代末期に造られたのは城ではなく館であることである。また築城の際に鬼門の方角である艮(北東)に寺社を置いたことに関する事例は事欠かないが、館の建設の際に館の区域外で鬼門の方向に神社を建立することが平安時代末期に一般的であったのかは浅学のためわからない(鬼鎮神社は、菅谷館跡の北東、約1.8kmに位置する)。

一方、重忠は畠山庄司次郎という呼称でも明らかのように、畠山荘の庄司であった重能の次男である。当時の一般的な慣習では、一人前の男性として認められる元服(通常14~15歳ごろ)。重忠が元服した時の年齢は不詳。仮に14歳で元服したとすると、その年は治承元年(1177)までは父の館である畠山館(深谷市畠山)に居住していたものと考えられる。そして、元服の後の

何時かに重忠は菅谷館に移住したものと推察される。治承4年(1180)、重忠は、源頼朝の挙兵に対し平氏方の武士として出陣、由井浦で戦った(『吾妻鏡』治承4年8月24日の条)。この時、重忠は17歳であったと思われるが、どこから出陣したのかは『吾妻鏡』に明記されていない。

今のところ、菅谷館に関する確かな記述は、鎌倉幕府が編纂した『吾妻鏡』以外には確認されない。その初見は、文治3年(1187)11月15日の条である。ここでは、畠山重忠が、身に覚えのない謀叛の疑いをかけられたことから、「武蔵国菅谷館」に引き籠って、身の潔白を訴えたことが記されている。このことから、文治3年11月15日以前に、重忠は生誕の地・畠山館から菅谷館に移っていたことになる。このように、重忠が菅谷館に居住していたことは明らかである。

菅谷館跡を記述した著作物のなかには、菅谷館は重忠が築いたと記しているものがあるが、それを裏付ける史料はない。居住者イコール建設者とは言い切れないことから、誰が菅谷館を築いたのかということについては現状では不詳とするしかない。

前述したように、菅谷の北側に隣接する平沢の地は、重綱の勢力圏であったと考えられる。また、久寿2年(1155)の大蔵合戦の際に、重忠の父重能が大蔵に出向いており、この前後に史跡の敷地内に畠山氏関係のなんらかの施設があった可能性は高い。鬼鎮神社の伝承は、重忠の元服後の時期にあたることから、重忠が菅谷館の建設者でなくても、寿永元年(1182)に移住したと読みかえれば、寿永元年築城説は捨て置きがたいものでもある。

次に『吾妻鏡』に菅谷館が記述されるのは、元久2年(1205)6月22日の条である。ここでは、鎌倉に異変ありとの連絡を受けた重忠が、6月19日に「小袞郡菅屋館」⁽¹⁹⁾から鎌倉に向かったことが記されている。6月22日、重忠は鎌倉幕府軍と現在の神奈川県横浜市旭区の二俣川で戦い、討死してしまう。このことから、元久2年6月19日までは、菅谷館の主は重忠となる。

それでは、重忠が暮らした館の跡は、史跡内のどの部分にあったのだろうか。現在の史跡の範囲は、戦国時代に城郭として整備・拡張された後の範囲なのである。菅谷館跡を紹介した刊行物のなかには、重忠の館は、史跡の本郭にあったと記されているものが複数ある。残念ながらその根拠は明記されていない。しかし本郭にあったとした理由は想定できる。

一つは鎌倉時代の武士の館は方形であるという学説があり、その説に準拠していることである。本郭の西側は北西南の3方向に土塁と堀が方形に形成されているのである。また、菅谷館跡から約4.5km東南にあり、都幾川の河岸段丘上に立地している青鳥城跡^{おどりじょう}は、菅谷館跡と同様に、平安末期(12世紀)頃に築かれた館跡が戦国時代に拡大整備されて城郭になっている⁽²⁰⁾。この青鳥城跡の本郭は現在でも方形が残存している。武士の館は方形である、そして同じ地域に同じ来歴をもった史跡の方形部分が館跡であるという青鳥城跡の情報から、重忠が暮らした住居跡が本郭の西側であると推察したのであろう。しかし、現在では、鎌倉時代の武士の館は方形館だけではないことが発掘調査により立証されていることから、方形部分が鎌倉時代の武士の館であると言い切れなくなった。

次に、館を設ける場所は、外敵から攻めにくい場所に築くものだという考え方から導き出されたものである。本郭南側は都幾川による河岸段丘の急斜面の崖があり、防御するには適切な地ではある。

以上のように、本郭の場所に重忠の館があったという言及は、学説から導きだされたものに過ぎない。これまで、本郭の発掘調査は行っていないため、出土遺物から12世紀頃と推定され

る生活痕をもとに言及されたものではないことを、明らかにしておく。

実は、それ以前に、現在の菅谷館跡の場所が畠山重忠の館跡であるという確実な裏付けはないのである。『吾妻鏡』に記された重忠の館のある場所は、「武蔵国菅谷館」・「小袞郡菅屋館」とあるだけで、これだけでは博物館のある史跡の場所とまでピンポイントで絞り込めることはできない。これまで、重忠の館の所在地が博物館のある場所とされる根拠は、江戸幕府が編纂した地誌『新編武蔵風土記稿』の比企郡菅谷村における古城蹟の項⁽²¹⁾に「(前略)ここを畠山重忠居城の地ともいい、(後略)」とあることと、史跡のある場所の小字が城であることを合わせて比定したにすぎない。『新編武蔵風土記稿』は江戸幕府が、各村々に提出すべき項目を指示し、村から提出された情報を『吾妻鏡』などの史料と照合し編纂したものである。つまり、地元の言い伝えが文字化された程度の裏付けしかないのである。ちなみに、吉田東伍著『増補大日本地名辞書 坂東』富山房、『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』角川書店、『埼玉県の地名 日本歴史地名体系11』平凡社では、比企郡菅谷は現在の比企郡嵐山町菅谷のみの登録である(ただし埼玉県内には上尾市(足立郡)に菅谷という地名があり、現在の登録名称「菅谷北城」という史跡はある)。

以上のことから、本郭の試掘調査は必須であろう。ただし、発掘調査を実施しても良好な状態で遺構や遺物が得られる可能性は高くない。本郭内が江戸時代から昭和30年代に至るまでに耕地として、鋤や鍬などで表土が耕作を受けていることのみならず、後述するように昭和7年(1931)に本郭の西側に金鶏神社が建立⁽²²⁾されて史跡が改変されてしまっているからである。

重忠没後、重忠の所領は北条政子の命令で没収されるが、重忠夫人は北条時政の娘であったことから、重忠未亡人の所領を改易しないことにしたことが『吾妻鏡』(承元4年(1210)5月14日条)に記されている。そして、重忠の未亡人は、足利義兼の次男の岩松義純と再婚し、畠山三郎泰国を生んでいる。菅谷館には、この岩松義純が住んでいたと前述の『新編武蔵風土記稿』⁽¹⁾には記されている。なお義純は、承元4年10月に35歳で卒したとされる⁽²³⁾。そして、これ以降、戦国時代前期にいたるまでの菅谷館の状況、館の主について、今までのところ手掛かりはみつかっていない。今後、岩松氏の系図など関連資料まで調査範囲を拡大して、岩松義純以降の動向を探る必要があるだろう。

次に、鎌倉時代における菅谷館跡の所在する場所に関係する可能性のある、鎌倉極楽寺の僧侶といわれる明空によって編まれた歌謡集『宴曲抄』[正安3年(1301)成立]に収録された「南無飛龍権現千手千眼日本第一大靈驗善光寺修行」⁽²⁴⁾を参考までにあげておこう。この史料は鎌倉の由比ヶ浜を起点として鎌倉街道上道沿いの地名が詠み込まれている。これによれば、「(前略)げに大蔵に、槻河(=槻川)の流れもはやく、比企野が原、秋風はげし吹上の、梢もさびしくならぬ梨(=奈良梨)打渡す(後略)」とある。これによれば、鎌倉街道上道の大蔵宿(嵐山町大蔵)と奈良梨宿(小川町奈良梨)の間で、大蔵宿側からみて槻川(現在ではこの地点を流れる河川は都幾川の名称となっている)を渡河した地点に「比企野が原」という地名が確認される。「比企野が原」が宿名であるのか不明であるが、この場所は現在の嵐山町菅谷あたりであることは間違いないだろう。「比企野が原」が菅谷の地であるならば、深読みすれば菅谷館があった場所は原地になっている、つまり館はなかったということがいえるかもしれない。

次に確認できる記録は、戦国時代前期までくだることになる。

(2)戦国時代前期[享徳3年(1454)～天文14年(1545)]に城郭として再興

長享2年(1488)6月18日、関東管領の山内上杉顕定軍と扇谷上杉定正軍は、須賀谷原⁽²⁵⁾で戦った。この須賀谷は、菅谷を指すものと思われる。須賀谷原とは先の『宴曲抄』における「比企野が原」と同一地域と考えられ、都幾川以北の鎌倉街道上道沿い(現在の嵐山町菅谷あたり)にあたる。菅谷中学校(嵐山町菅谷649)に隣接する荒井文具店(菅谷650-1)の正面には、「嵐山町本宿町」と住所が記されている。『新編武蔵風土記稿』の比企郡菅谷村に記された小名に「元宿昔宿並をなせし所なり」とあり、元宿は、以前にこの場所が宿であったことを示している地名なのである。商店の住所として記された本宿の読みは「もとじゅく」である。元宿では昔は栄えていたが今はそうではない印象があるので本宿にしたという。なお、明治9年(1876)に調査した結果を昭和29年(1954)に刊行した『武蔵国郡村誌』第六巻に所収される菅谷村の項目のなかに、字地として「^{もとじゅく}本宿」と記載されていることから、元宿を本宿に改めたのは、明治9年以前であると考えられる。

以上のことから、現在の菅谷中学校を含めた周辺地域が鎌倉街道上道沿いの宿の範囲であったと推定される。なお、鎌倉街道上道の推定ルートに接し須賀谷原の一部と考えられる嵐山町大字菅谷254-1他(須賀谷原遺跡・菅谷館跡から北東に約500m)を発掘した結果、道路跡、鎌倉時代の塚跡と戦国時代の墓域が確認され、紀年銘は確認できないものの戦国期と判断される五輪塔などが出土している⁽²⁶⁾。

僧侶の万里集九によって編まれた『梅花無尽蔵』⁽²⁷⁾によれば、(長享2年(1488)8月)17日、須賀谷の北、平沢山に入り、太田源六資康の軍営を問う。明王堂畔において2～30騎突出し、余(=集九)を迎えるとあり、このとき菅谷の北方にある平沢山に陣営を敷いていたのは、太田道灌の息子の太田資康であった。明王堂とは不動堂のことで、この堂に安置された不動明王はもと平澤寺の本尊であったことから、明王堂は平澤寺境内の一堂であり、ここで集九は出迎えられたのであった。

文明18年(1482)7月26日、太田道灌は主君の扇谷上杉定正により謀殺された。この時、資康は江戸城に戻り家督を継ぐが、定正に江戸城を攻められ甲斐国に逃れた(江戸城の乱)。この後資康は、庇護を求め定正と対立していた山内上杉顕定の居城である鉢形城に入る。長享元年(1487)閏11月の勸農城(栃木県足利市)の戦い以降、両上杉氏の抗争が本格化する(長享の乱)。翌2年、越後国の守護の上杉房定の支援を受けた顕定は、2月に太田資康らとともに鉢形城を1,000騎で出発、扇谷上杉方の相模に進攻し、2月5日、実蒔原(神奈川県伊勢原市と厚木市の境界付近)で合戦におよぶ。なお、この合戦は、顕定が定正の本拠糟谷館(神奈川県伊勢原市)を攻略する過程で起こったとする見解、顕定が実蒔原から至近の扇谷方の拠点の七沢を攻撃するために起こったとする見解がある。この合戦では、顕定軍は敗れてしまう。同年6月8日、顕定が上杉憲房らと須賀谷原に出陣⁽²⁸⁾し、同日に山内・扇谷の両上杉氏により武蔵松山(吉見町)で合戦が行われた⁽²⁹⁾。この合戦は、顕定が扇谷上杉氏の拠点である河越を攻撃する過程で起きた合戦であったらしい⁽³⁰⁾。この顕定の動きに対し、顕定と対立していた長尾景春が古河公方足利成氏の嫡子政氏とともに定正軍に加勢した。6月18日、須賀谷原において交戦、両軍の死者は700余人、馬も100疋ほど犠牲となったが、再び定正軍が顕定軍を退けた。同年11月には定正軍が、顕定の拠点鉢形城に向け攻め寄せてきたため、顕定軍は同月15日に高見原(小川

町高見)で迎え撃ったが、顕定はここでも敗れてしまう。

このように、太田資康は山内上杉顕定の本拠である鉢形城の南方の固めとして、須賀谷原の合戦の後の長享2年8月17日までには平沢山に陣を敷いていたのである。しかし、この『梅花無尽蔵』だけでは、太田資康が扇谷上杉定正の攻撃に備え、平城である須賀谷城を棄て西北の平沢山を要害として陣を移したとはいえない。一方、太田資康が須賀谷に入っていたのであれば、築城の名人といわれた太田道灌を父にもつ資康により城として整備された可能性はある。

(年不詳。ただし、長享2年(1488)の須賀谷原の戦いから忠景が没する文亀元年(1501)の間に比定されている⁽³¹⁾)11月22日付の長尾忠景書状⁽³²⁾によれば、「須賀谷へ参上すべき人数は、註文(注進状)によって申しつける」[＝「須賀谷へ可越申人数、以上註文申候(後略)」(原文表記)]と、山内上杉顕定の家宰である総社長尾忠景が「須賀谷」にいて、鎌倉雲頂庵に対して須賀谷へ僧侶の派遣を要請している。残念ながら、この僧侶派遣の目的は不明である。また、当時は地名のみの記載ではあるがそれは地名ではなく城を示す事例はあるが、ここでの「須賀谷」が須賀谷の地であるのか須賀谷城であるのか判断できない。

明応3年(1494)10月3日、扇谷上杉定正は戦場で落馬し頓死した。このため扇谷上杉氏は、養嗣子の朝良が家督を継ぐと、太田資康は扇谷上杉氏と和睦し仕えることになった。このとき資康は須賀谷に居たといわれているが、和議が成立し長享の乱が終結した永正2年(1505)頃に江戸城へと帰還したとされる。その後、太田資康とその子孫は江戸城主または江戸城代を務めている。

永正2年(1505年)3月、再度山内上杉顕定の軍勢に河越城を包囲された扇谷上杉朝良は降伏を表明した。顕定はかつての戦場であった須賀谷原近くの菅谷館^(ママ)に朝良を幽閉して出家させ、朝良の代わりに甥の上杉朝興を当主に立てることを扇谷上杉家臣団に強要したという⁽³³⁾。しかし、扇谷上杉家臣団の反発が強く、また古河公方家足利政氏と嫡男高基との不仲が問題化すると、顕定もこの方針の修正を余儀なくされ、朝良が解放されて河越城に戻ると直ちにこの話はなかったこととされた(なお、朝興当主説を後に朝良の子に代わって当主となった朝興周辺が家督相続を正当化するために作った創作とする説もある)。永正4年(1507年)、顕定の養子上杉憲房と朝良の妹の婚姻が成立して山内・扇谷両家の同盟関係は復活した。

(永正2年(1506))4月23日付の佐竹右京大夫あてに出した上杉顕定書状写⁽³⁴⁾がある。そのなかで、顕定が「須賀谷」と号する所に移ったのでご安心いただきたい[＝「号当所須賀谷地へ移候、爰元事先以可御心安候(後略)」(原文表記)]と記されている。無年号の文書であるが、上杉朝良が隠遁していることが記されていることから永正2年に比定できる。顕定の居城は鉢形城であることから、この「当所須賀谷と号す地へ移った」という表現は、居城を鉢形城から須賀谷城に移したのではなく、長享の乱のさなか陣を須賀谷に移したと理解すべきであろう。しかし、山内上杉家11代当主であり関東管領である山内上杉顕定が須賀谷に陣を移したのであれば、宿营地は整備されていた、もしくはこの移陣の際に整備されたものと考えられる。つまり、顕定の須賀谷移陣の際に須賀谷城が築かれたのかもしれない。また、須賀谷(菅谷)城は、おそらく恒常的な城郭というよりも、山内上杉氏の対扇谷上杉氏の拠点として臨時的に機能していた城郭であったことが推測される⁽³⁵⁾。

なお、前述した「武州菅谷城」⁽¹⁾に「武州比企郡菅谷村ニアリ、昔日上杉管領居城之由、菅谷

ノ町ヨリ辰巳ニ当リ、町ヨリ六町ホトアリ」(原文表記)とあり、菅谷城が関東管領の山内上杉氏の居城という伝承があったと記している。この上杉氏は、山内上杉顕定[享徳3年(1454)生～永正7年6月20日(1510年7月25日)没]であると思われる。

陣僧の松陰によって記された回想録『松陰私語』⁽³⁶⁾(永正6年(1509)の成立)には、松陰が主君の上野国新田荘の新田岩松家純(源慶)(1409年生か～1494年没)に対し「今日の御新発、少し差し延ばされ、河越に向け須賀谷旧城を再興し[=「向河越、須賀谷旧城を再興」(原文表記)]、当鉢形普請固く取り極め、御当方の面々、所々地利断わりて相誘い、その上しかるべき地を見立々々、地利を取寄々々、押し詰めらるは、果たして降和らるべく也」、「これについて先ず鉢形・須賀谷堅固に再興、その上に敵地に食入々々」と、まず居城である鉢形城を、そして河越城の向城として須賀谷旧城を堅固に再興することを進言したことが記されている。ここで重要なのは、須賀谷旧城を再興せよと言っていることである。館を城に整備せよとは言っていない。このことから、松陰は、放置または廃城となっている須賀谷城を再興せよと提言しているのであり、提言(何時かは史料に記されていないため不詳)された以前に須賀谷城が築城されていたことを読み取ることができる。この文脈の後に、上杉定正の急死のことが記されている。該当箇所の記事が時系列順どおりに記されていると仮定するならば、先の提言は明応3年(1494)以前の可能性がある。すると、旧城の築城者は、山内上杉顕定のもとで太田資康が実施した可能性が出てくる。太田資康が実施したとなると、築城は、太田資康が江戸城に帰還する永正2年(1505)頃以前の長享の乱の期間と考えることができる。先人もこのように解釈したのか、「長享年中^(ママ)扇谷上杉の臣太田源六資康が城塞として使用し」と記した事例⁽³⁷⁾がある。

また、松陰の提言によって、旧城が再興されたのであれば、その再興には岩松氏が関与していた可能性がある。この新田荘の岩松氏が、どのような人物であるのか注目される。それは、鎌倉時代に重忠の未亡人と婚姻した岩松義純の系譜を引く子孫が上野国新田荘を本拠としている⁽³⁸⁾からである。このことから「新田岩松氏系図」の再調査は必要である。

永正6年(1509)7月以降、顕定は越後の政争に介入し、越後に進出。翌7年正月は越後で迎えており、4月上旬の段階においても、越後に在国していたことが確認される⁽³⁹⁾。6月6日には蔵王堂合戦(長岡市)の後、上野国に向けて退却していた顕定は、同月6月20日、上田荘の長森原(南魚沼市)で敗れ、自害した。このように、顕定は、前述の上杉顕定書状写⁽³⁴⁾によれば永正2年(1505)4月23日以前に須賀谷城に入ったものの、永正6年7月以降は須賀谷城には在城していなかった。顕定の跡を継いだ上杉顕実が、須賀谷城に居住していたかどうか不明であるが、永正9年(1512)時点で顕実が長尾顕方や成田顕泰らの支援を受けて鉢形城(寄居町)に拠った⁽⁴⁰⁾が、同年同月には居城の鉢形城が落城⁽⁴¹⁾していることがわかっている。これ以前、顕実がどこに居住していたのか不明である。以上のことから、関東管領山内上杉氏(顕定・顕実)による須賀谷城在城は、永正2年4月23日以前の顕定の在陣を上限とし、可能性として下限は永正9年に顕実が鉢形へ入城する以前となる。

永正6年(1509)、連歌師の宗長が旅した際に詠んだ連歌を載せた紀行文『東路の津登』⁽⁴²⁾がある。永正6年(1509)年7月、宗長は駿河国を出発して、白河を目指し宇都宮まで至るが、兵乱と大雨のため白河行きを断念。その帰路、鉢形を経て須賀谷の小泉掃部助の宿所にて1日休み、平澤寺あたりにも立ち寄り歌を詠んでいる。この紀行文に、「鉢形をたちて、須賀谷といふ

所に小泉掃部助の宿所に一日休らふ」という記述があり、須賀谷にある小泉掃部助守之の宿所で休息したことがわかる。福島正義は、「(前略)その後菅谷城は小泉掃部助の持城となった。永正六年(一五〇九)に当地を訪れた連歌師の宗長は、その著『東路の津登』のなかで、鉢形から菅谷へ到着して、小泉掃部助の宿所に滞在し、付近の平沢寺で連歌会を催したことを述べている。この掃部助の宿所とはもちろん菅谷城のことである。」としている⁽⁴³⁾。しかし、ここにある「宿所」を須賀谷城と断定してよいのであろうか。「陣」であるのならば城と解釈することもできるかもしれないが。永正6年に上杉顕定は越後に出陣しており、顕定の留守を預かるために小泉掃部助が須賀谷城に宿営したことを「宿所」といったのであろうか。それとも宿所は城とは別な施設で、城はこのとき廃城になっていたのであろうか。なお、小泉掃部助は、後述の『築城学教程』によれば鉢形城主(=山内上杉氏)配下の武将であるとしている。

(3) 戦国時代後期[天文15年(1546)～天正18(1590)]の須賀谷(菅谷)城の動向

天文15年(1546)の河越夜戦以後、北武蔵地域に戦国大名小田原北条氏が進出し、越後の上杉謙信との抗争に終止符を打った天正6年(1578)年以降、北武蔵地域を掌握した。

その後、北条氏は、天正10年(1582)12月9日付で伝馬掟⁽⁴⁴⁾を発令する。その第一条に「一、西上州表へ伝馬の事、奈良梨より高見へ次ぐべし、この方は須賀谷へ次べく事」とある。このように須賀谷は、高見(共に長享の乱の際の戦場)や奈良梨とともに小田原北条氏にとって重要な伝馬の中継地であった。小田原北条氏時代の須賀谷に関しては、この伝馬掟以外の文書は確認されていない。なお、この掟における「須賀谷」は伝馬を引き継ぐ宿駅の場所を示すものであり、城と断定することはできない。一方、高見には城があり、奈良梨には城はなかったが奈良梨宿を監視できる場所に越畑城があった。このように天正10年時点で、須賀谷城が存続していた可能性はあるものの、実証する資料は今のところ確認されない。

天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めの際、豊臣方が作成した北条方の城郭を記した「関東八州城之覚」⁽⁴⁵⁾によれば、武蔵国では岩つき(岩付)、瀧山、河越、江戸、おし(忍)、はちかた(鉢形)、ふかや(深谷)の記載はあるものの、須賀谷(菅谷)は記されていない。また「北条家人数覚書」⁽⁴⁶⁾にも同様に、須賀谷(菅谷)城の記載はない。須賀谷城は、この時には既に廃城となっていたのか、主要な城ではないと判断され記載されなかったのか、あるいは調査から漏れてしまったのか、残念ながらわからない。

これまで、『築城学教程』⁽⁴⁷⁾に、「此城畠山重忠所創築、至長享戊申(=2年)之歳八月太田源六資康増築之以為其軍營、後年鉢形城主使其部将小泉掃部助守之爾云」(原文表記)とあり、『埼玉の館城跡』⁽³⁷⁾では、「城主・居住者 畠山重忠、太田源六資康、小泉掃部助介(伝承)」^(マア)としている。しかし、重忠が菅谷館に居住していたことは裏付けでき、太田資康が菅谷城を築城した可能性はあるが、小泉掃部助の宿所が菅谷城であったのかは前述のとおりである。一方で、関東管領の山内上杉顕定が一時在陣していた。

以上のように、菅谷城がいつ、誰により築かれ、また再興されたのかを明確に実証する資料は確認されていない。そして、文献資料から、城がどのように使われ、いつ廃城となったのか具体的なことを窺うことができない。また、戦国時代に描かれた菅谷城の絵図も現状では確認されていない。

(4) 菅谷城址は江戸時代には菅谷村の一部

松山城が慶長6年(1601)に廃城になった後、北武蔵に残された城は岩槻城・忍城・川越城の3城であることから、遅くともこれ以前に須賀谷城は廃城になっていた。

江戸時代には様々な絵図が作成されている。まず、江戸時代の初め寛文12年(1672)に作られた前述の城絵図集『城築規範』⁽¹¹⁾に収録される「武州菅谷城」がある。この『城築規範』の序文には、戦国時代に築城あるいは改築された城郭が次々と姿を消して行き、現在その遺構が残されているものは十に一つもない。そこで残されている城郭について図面を作成し、後世に伝えようとするものである、とある。この絵図以外にも、「諸国古城之図」[天和3年(1683) 広島藩主浅野家旧蔵。現在、広島市立中央図書館蔵]や「日本古城絵図」[江戸中期～末期に編纂 鳥羽藩主稲垣家旧蔵。現在、国立国会図書館蔵]もあるが、これらは、『城築規範』を参照し作成した絵図、つまり実際に現地を調査して作成されたものではないと推察され、菅谷城に関しては『城築規範』とほぼ同一な記載である。

菅谷城は、江戸時代には菅谷村の一部として組み込まれていた。菅谷村の検地帳や村絵図や村明細帳は今のところ確認されていない。しかし城跡が耕作地となっていたことが次の資料により確認される。江戸時代後期に幕府が編纂した『新編武蔵風土記稿』には菅谷村に「古城蹟」の項⁽²¹⁾があり、

およそ三町(約327m)四方の地にして、南の一方は都幾川をもって要害とし、その余の三方は空堀ありて、所々に堤(=土塁)の形残れり。その内は全て陸田となりたれど、今も本丸・二の丸・三の丸などの名あり。『梅花無尽蔵』に云う、長享戊申(=2年)八月十七日、入須賀谷之北平沢山、問太田源六資康之軍営と。この辺に平沢村あれば、須賀谷はここのことなるべければ、この頃は太田氏の陣営なりしこと知る。(中略)また、ここを畠山重忠居城の地ともいへり。のち岩松遠江守義純、いったん畠山が名跡を續きて、ここに住せしなどいへり。されば、重忠、晩年当所に移りしこと知る。『吾妻鏡』元久二年六月二十二日の条に、重忠十九日小袞郡菅屋館を出て云々とあれば、全くこの地のことにして、郡名はたまたま訛り書せしにや(後略)(原文表記)

とある。

このほか、享和元～2年(1801～02)に福島東雄により編纂された地誌『武蔵志』⁽¹⁰⁾に掲載される「菅谷古館」の図がある。本文⁽⁴⁸⁾に、

須賀谷 古へハ菅谷ト書、(中略)野林アリ、原アリ 比企野トモ云、南都幾川額地ニテ古城アリ、高望王ヨリ六代、秩父別当大夫武基ヨリ六代、秩父庄司次郎重忠ノ菅谷ノ館ト云ハ是ナリ、男袞郡畠山ヨリ移、年月未考、重忠ハ元久二年六月廿二日、荏原郡二俣川ニテ伏誅シ跡、岩松遠江守義純ヨリ数代居シ跡ナリ(原文表記)

とあり、「菅谷古館」を重忠の菅谷館であると認知していたことがわかる。

また、江戸時代の城跡の景観図も残されている。それは、先に取り上げた『新編武蔵風土記稿』に収録されている「古城蹟眺望図」⁽⁴⁹⁾である。この景観図は、史跡の北側(=現在の菅谷中学校あたり)から南の方角を描いている。菅谷中学校付近は、史跡と比較して高い位置にあるだけでなく、小字名が元宿であるように、中世の須賀谷宿の中心的な場所である。菅谷小学校の校庭からでは、この絵図のようには見えないが、ドローンを中学校の校庭の上にあげれば、見ら

れる構図(鳥観図)である。画面中央に流れている川が都幾川と槻川。その手前(画面左側下部)に「古城蹟」とあることから、この部分が菅谷城跡の本郭にあたる。そして、この絵図から江戸時代後期には、史跡内に農家の家屋が建てられていたこともわかる。

以上のように、江戸時代に菅谷城に関する城絵図が複数確認されているが、縄張は示されているものの、虎口などの名称は具体的に提示されていないことを明らかにしておく。

現存の史跡と「武州菅谷城」⁽¹¹⁾を比べると以下のような相違点を確認できる。まず、堀と土塁の切れ目に違いがみられる。現在、搦手門と呼称している箇所には堀と土塁の切れ目があるのに対し、①「大妻嵐山高校入口」の標示のある信号機のある交差点から嵐山町道(砂利道)を通り三ノ郭に入る入口となっている箇所に、堀と土塁の切れ目が「武州菅谷城」にはない。②二ノ郭の北側と三ノ郭の南側の間の嵐山町道(砂利道)がある場所は、堀であった。この堀は、東側の外堀には接続していない。③「武州菅谷城」には二ノ郭の北側に土塁があるが、今は削平されていない(ただし、土塁があったことを復元したツツジの植栽がある)。④三ノ郭と西の郭の間の堀の切れ目は1か所である。⑤「武州菅谷城」には西ノ郭の西側には虎口はなく、三ノ郭との間以外に、堀と土塁が切れ目なく描かれている。このほか、⑥本郭の南側は「ガケ」と記載されているだけで、現在「南郭」されている箇所を郭として認識していない。

次に、現状(令和2年時)と享和元～2年(1801～02)に編纂された『武蔵志』に収録された「菅谷古館」⁽⁴⁾を比べると、上記と同じような相違点が見られる。①「大妻嵐山高校入口」の標示のある信号機のある交差点から嵐山町道(砂利道)を通り三ノ郭に入る入口となっている箇所に堀と土塁の切れ目が、「武州菅谷城」と同様に「菅谷古館」にはない。また、「菅谷古館」には三ノ郭内に段差が示されているが、これは、駐車場の場所と博物館の建つ場所の高低差を表わしているものと考えることができる。②二ノ郭の北側と三ノ郭の南側の間の嵐山町道(砂利道)がある場所は堀があった。二ノ郭の北側に土塁が記されているが、今は削平されていない(ただし、土塁があったことを復元したツツジの植栽がある)。この堀は、東側の外堀には接続していない。③三ノ郭と西の郭の間の堀と土塁の切れ目は1か所である。④本郭の南側は、現在は「南郭」であると認識しているが「菅谷古館」では郭として認識していない。⑤現在、搦手口としている三ノ郭北側の虎口は、堀と土塁の切れ目が記されている一方、西ノ郭の西側には虎口はなく、西ノ郭と三ノ郭との間以外に、堀と土塁が切れ目なく描かれている。かつて、西ノ郭の西側の土塁の切れ目を「大手門跡」と呼称していたことがあった。しかし、後述するような理由により現在では西ノ郭に「大手門跡」があったという説明は行っていない。⑥西ノ郭の西側に、「ホリ田」と記され、泥田堀があったと認識している。

(5) 明治時代の史跡の状況

明治時代以降については、現状と絵図の比較しながら考察していく。明治以後も、菅谷城跡は菅谷村の一部であり、農民個々の私有地(宅地・耕作地)であった。

前述の明治12年(1879)3月日の日付を記した「畠山重忠之城跡現今之図」⁽⁹⁾と現状とを比べると、次のようなことが確認できる。①「大妻嵐山高校入口」の標示のある信号機のある交差点から嵐山町道(砂利道)を通り三ノ郭に入る入口となっている箇所の堀と土塁に赤色の線で道が記される。そして、史跡内には現在の嵐山町道(砂利道)とほぼ同じ場所に道筋が描かれ、三ノ

郭と二ノ郭を縦断し、本郭内に通じている(寛文12年の「武州菅谷城」や享和元～2年に作られた「菅谷古館」にはこの道は記載されていない)。現在あるこの道筋は、享和2年以降に造られた可能性がある。つまり、三ノ郭の土塁の切れ目は、享和2年以降に道を通すために造られたと考えることができる。あるいは、江戸時代の絵図は縄張図として描いたもので、城内の道は当初から記すことを考慮していなかったため描かれていなかったのかもしれない。②本郭を縦断した道は本郭の南側の土塁上で東側に折れ、その後、南下して都幾川の河原に接続している。この本郭南の土塁上から都幾川に至る道は現在ない。②一方、現在では本郭北側の堀に沿って本郭の西側の堀沿いを經由し都幾川に至る道があるが、この絵図には記されていない。この現在ある道筋は、嵐山カントリークラブのロッジが二ノ郭西側に建設[昭和36年(1961)から昭和41年(1966)の間]されて以降、都幾川とのアクセスの便を図るために、造られたものではなからうか。③三ノ郭の南側と二ノ郭の北側の間には現在、嵐山町道(砂利道)が通っているが、この絵図では、砂利道の部分が堀として描かれ、二ノ郭の北側には堀と土塁が描かれている。このことは、現在の砂利道は、この絵図が作成された時にはなく堀であったことがいえる。また、江戸期に描かれた絵図2点と同様に、この堀は、東側の外堀には接続していない。④現在「搦手門跡」と呼称している虎口が「追手口」(＝大手口)と記されている。⑤西ノ郭の西側には虎口がない。そして江戸時代の2枚の絵図には記されていた西ノ郭と三ノ郭の間、二ノ郭と本郭の間には堀と土塁に切れ目がない。⑥この絵図には、「口」と記された5か所の虎口が描かれている。前述の「追手口」のほか、本郭の東側にある現在では「生門跡」、三ノ郭と二ノ郭をつなぐ現在では「門跡」と呼称している場所は現在でも残っているが、西ノ郭北側で三ノ郭寄りの場所、二ノ郭の南西部の虎口は現在認識されていない。⑦本郭の南側に二ノ郭が回り込む(二ノ郭が本郭を囲む)ように描かれている。⑧現在は畠山重忠のコンクリート像(昭和4年(1429)建立)が建つ土塁には、明治12年当時、天神社があった。⑨史跡の外ではあるが、遺跡の東南、都幾川よりも北側の場所に、史跡に隣接して「長慶寺跡」と記されている。この長慶寺については、『新編武蔵風土記稿』や『武蔵志』における菅谷村の項に記述はない⁽⁵⁰⁾。

(6)大正時代の史跡の状況

菅谷館跡を県指定史跡とするために調査した結果をまとめた報告書『自治資料 埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯』⁽²⁾がある(県指定は大正12年3月31日)。ここには、「菅谷ノ館址」として、その所在地、現況、沿革、そして「菅谷館址現形全図」⁽⁵¹⁾が収録されている。この絵図の最大の特徴は、館跡の部分名称の詳細が初めて記されているところにある。しかし、名称を付すための根拠は記されていない。

郭の名称として、「10本丸曲輪跡」・「11二丸曲輪跡」・「12三丸曲輪跡」・「13外郭曲輪跡」が記されている。門の跡として、「14大手門跡」・「15正拵門跡」・「16搦手門跡」・「17二丸門跡」・「18本丸門跡」・「19生門通跡」がある。「14大手門跡」は、当時、「20旧鎌倉街道の道筋」と想定された側に面している土塁に切れ目があることから、この場所を城郭の正面口と考え、城の表門である大手の門跡として命名されたものと思われる。しかし今日では、鎌倉街道は館跡の西側の西ノ郭側ではなく、明治12年3月の日付を記した「畠山重忠之城跡現今之図」⁽⁹⁾に「町家跡 字本宿」とあるように史跡の東側、つまり現在の国立女性教育会館側を通っていたという説が有力となって

いることから、西ノ郭にある土塁の切れ目を大手口と断言することができなくなった。このほかに、本郭の内側に「8本営天守閣跡」、二ノ郭に「7菅谷館址碑石(中央大高櫓跡あり)」があったとされ、二ノ郭の土塁上で現在では重忠像の建つあたりに「6畠山殿五常石」が建てられていることがわかる。

現在当館発行のガイドブックなどで使用している菅谷館跡の部分名称は、基本的にこの大正期の資料をもとにしている。

なお、大正時代に作られた「菅谷館址現形全図」にも本郭の南側には名称が付されていない。

昭和48年(1973)に菅谷館跡が国指定史跡に指定され、翌年から博物館を建設するための事前調査の時に、本郭の南側の区画を南郭と呼び、これと区別するため「13外郭曲輪跡」を西ノ郭と改称し、今日に至っている。江戸時代の3枚の絵図には、本郭の南側に区画はなく、明治12年の絵図には二ノ郭が回り込むように描かれている。これら4枚の絵図が当時の状況を忠実に描いているとするならば、南郭の平場は、享和元～2年(1801～02)から明治12年(1879)の間に造られたことになる。

(7)昭和時代の史跡の状況

昭和7年(1932)に本郭内の西側部分に金鷄学院の施設として金鷄神社が建立された⁽²²⁾。

昭和20年(1945)敗戦後、米軍から菅谷接收の噂があり、GHQにより日本農士学校の解散が命じられる。そして、中心的存在であった金鷄神社の取り壊しが命じられ、昭和21年(1946)1月17日に解体される。

なお太平洋戦争前には、史跡の東側の溪谷は水田になっていたことが、「菅谷之荘 日本農士学校全図」⁽²²⁾から確認される。この史跡の東側の溪谷は、都幾川につながっているため、水田として造成される以前、都幾川に運ばれた物資が、この溪谷づたいに小舟に積み込まれて運ばれたのではなかろうか。また、本郭の東側の虎口は、大正12年(1923)時には前述の報告書にあるように「生門通跡」、現在では「生門跡」と呼称しているように、本郭に立て籠もった者たちが、外敵により攻撃され本郭内に侵入されそうになった際、生きるための避難口の役割を果たしていたのではなかろうか。

地元には太平洋戦争中および戦後間もない時期に、三ノ郭北側の土塁を崩し外堀を埋めて耕作地としたことが伝えられている。

このように、史跡は戦前民有地であったが、徐々に公有地化がすすめられ、現在では、全て公有地(埼玉県有地のほか、国有地と嵐山町有地もある)になっている。

3 発掘調査の成果から

菅谷城跡の三ノ郭の東側を発掘調査した結果、現在、駐車場のある場所に井戸があり、その井戸のなかに、正中3年(1326)や享徳2年(1453)などの年号を刻んだ板碑⁽³⁾が投棄されていたことがわかった。そして、享徳2年(1453)の板碑があまり風雨にさらされることなく、つまり造立してから時間をおかずに埋もれたことが、板碑の表面に残された金泥が残されていたことにより裏付けられた。このことから、遺構や板碑以外の出土遺物の考察も含め、三ノ郭の場所は、城としてか否かは別として1453年からほどなく再整備がなされたものと考えられないだ

ろうか。

水口・栗岡氏は、三ノ郭の東側の場所は、14世紀前半から16世紀初頭の期間を墓域として利用されていた時期、15世紀後半から16世紀前半を居住空間として機能していた時期と言及している。この考古学の成果は、先に述べた文献から15世紀後半の長享の乱時に須賀谷城を再興したという推論と時期は一致する。

なお、縄張調査により、土塁や堀の形状や特徴から、戦国大名系の技巧的な城郭遺構と判断、この遺構は小田原北条氏が北武蔵に進出した時代に造られたとする説(=16世紀後半の説)がある。縄張研究者が作成する縄張図は、発掘を伴わないため、橋口定志は、「縄張り調査は地表面観察によっているので、城の最終形態だけしか研究対象にできない」と指摘する。このため、築城とその後の改築を区別しなければならないのであるが、縄張調査ではそれを見分けることができない。やはり、発掘調査により土塁の断面を確認するとともに、そこに含まれる遺物から時期を確認しなければならないのである。ちなみに、菅谷城跡に関しては限られた場所での発掘であるため最終的な結論を出すことはできないが、これまでの発掘調査からは16世紀後半(小田原北条氏が北武蔵進出した後)の遺物は出土していないという。

結びにかえて(今後の課題)

以上言及してきたことをまとめることはしない。菅谷館跡については、重忠居住以前に、畠山氏によるなんらかの施設があったことを念頭に置いて、文献および発掘調査を行う必要があるだろう。また城絵図を含めた絵図については、それぞれの絵図の性格を踏まえうえて、再度検討すべきであろう。特に、大正期に大手門跡と呼称された土塁の切れ目は、城として使用されていた時からあったものなのか、また5次調査で確認された三ノ郭西側の土塁の切れ目は、果たして城として使用されていた時からあったものなのかなど、絵図と発掘成果との照合は欠かせない。

須賀谷城の築城についても、今後つめていかなければならないだろう。「須賀谷旧城再興」が提言された時期は、長享の乱の頃と推察されるので、それ以前であることには間違いない。鎌倉時代末期に作成された『宴曲抄』には「比企野が原」とある。また、『太平記』によれば、鎌倉街道上道沿いで史跡に近い笛吹峠(史跡から直線距離で南東方向に約3km)に戦に敗れた新田義宗軍が駐留していることが確認される。このことから、鎌倉街道上道沿いにおいて軍事的緊張があったことが想定される。この南北朝の内乱の時代に城が築かれた可能性があるのではなかろうか。史跡については、この時代の一次資料が確認されていないことから、空白の時期となっている。一次資料の探索はもとより、南北朝期の軍記物などを改めて点検する必要があるだろう。あるいは、長享2年の須賀谷原の戦いの際に須賀谷城が築かれたが後に放棄され、長享の乱の最中に再興されたものと考えべきか。

また、三ノ郭と西ノ郭の造成年代、造成理由の検討も必要であろう。藤木久志によれば、「二の曲輪より外側は地元の武家奉公人や百姓たちにも開かれていた、いわば公共の空間であった。」「どの城掟の曲輪観も実によく似ている。内郭は確かに禁域であったが、外郭(二の曲輪・三の曲輪・二の丸・三の丸)は、商人や客人や領民にいつも開かれ、いざという時は領域の住民たちの共同の避難所となった。」という⁽⁵²⁾。この言及をそのまま菅谷城に当てはめることは

許されない。しかし、これまで菅谷城の広大な三ノ郭は、小田原北条氏軍または鉢形城主北条氏邦軍の駐留地として言及されているのみであった。小田原北条氏は、豊臣秀吉との対決を想定し、天正15年(1587)頃から領内の城郭の整備を命じている。菅谷城がこの時期に整備されたことを示す古文書は確認されないが、この時期に手が加わっている可能性を否定することはできない。

そして菅谷城跡は、本郭内や二ノ郭内は平坦地となっているのに対し、三ノ郭は郭内に段差があり、西ノ郭内は傾斜がある。菅谷城の拡張・整備が数度にわたり行われたことを念頭に置きながら、文献調査および発掘調査を実施していかなければならない。嵐山町役場には、明治9年(1876)の菅谷村の公図が残されていることが確認できた。史跡解明ための課題は多く、未調査の資料はまだ残されているのである。

註

- (1) 国立公文書館蔵。刊本として『新編武蔵風土記稿』第10巻 雄山閣版を参照した。
- (2) 埼玉県 1923 『自治資料 埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯』(のち1989年に埼玉県立浦和図書館により、埼玉県立図書館復刻叢書(十二)として復刻)
- (3) 埼玉県教育委員 1977 「埼玉県埋蔵文化財調査報告第6号 菅谷館跡 埼玉県立歴史資料館建設用地発掘調査報告」、埼玉県教育委員会 1977 「埼玉県遺跡発掘調査報告第14集 菅谷館跡 国道254号(嵐山バイパス)改良工事に伴う発掘調査報告」、埼玉県立歴史資料館 1979 「菅谷館跡環境整備基本構想」
- (4) 小野義信 1984 「比企地方の中世城郭 その3 一国指定史跡 菅谷館跡の構造について」(埼玉県立歴史資料館『研究紀要』第6号)ただし、縄張についての考察はあるものの、関係文書・城絵図については紹介にとどまり分析は行っていない。
- (5) 水口由起子・栗岡真理子 2003 「菅谷館跡出土遺物の再検討」(埼玉県立歴史資料館『研究紀要』第25号)
- (6) 埼玉県立嵐山史跡の博物館 2010 「遺物が語る中世の館と城 ～菅谷館跡の理解のために～」(埼玉県立嵐山史跡の博物館)・測量図はここに掲載される。
- (7) 梅沢太久夫 2003 『城郭資料集成 中世北武蔵の城』岩田書院、2018 『埼玉の城 127城の歴史と縄張』まつやま書房など。
- (8) 航空写真：国土地理院：昭和36年5月(KT-61-5C3A-009)、埼玉県立文書館：昭和41年9月(A-10-07)などで確認することができる。
- (9) 埼玉県立嵐山史跡の博物館蔵(資料番号 SHI1984-008-01)
- (10) 個人蔵。画像は、埼玉県嵐山史跡の博物館 2019 「嵐山史跡の博物館ガイドブック2 改訂版 国指定史跡比企城館跡群 菅谷館跡」p.4 参照。
- (11) 陸奥津軽家に伝承。現在、人間文化研究機構国文学研究資料館蔵。画像は、埼玉県嵐山史跡の博物館 2019 「嵐山史跡の博物館ガイドブック2 改訂版 国指定史跡比企城館跡群 菅谷館跡」p.3 参照。
- (12) 千田嘉博 2013 『信長の城』岩波新書
- (13) 嵐山町遺跡調査会 1987 『嵐山町遺跡調査会報告3 行司免遺跡一遺構図版編一』、嵐山町遺跡調査会 1988 『嵐山町遺跡調査会報告4 行司免遺跡一本文編一』、嵐山町遺跡調査会 1988 『嵐山町遺跡調査会報告5 行司免遺跡一遺物図版編一』
- (14) 安田元久 1984 『武蔵の武士団 一その成立と故地をさぐる』有隣堂、清水 亮 2018 『中世武士畠山重忠秩父平氏の嫡流』吉川弘文館など
- (15) 県指定文化財 鑄銅経筒。埼玉県立嵐山史跡の博物館寄託資料。画像は、埼玉県嵐山史跡の博物館 2013 「嵐山史跡の博物館ガイドブック1 菅谷館の主 畠山重忠」p.1 参照。
- (16) 野口 実 2004 「鎌倉武士の心性」(五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院に所収)
- (17) 野口 実 2007 『源氏と坂東武士』吉川弘文館
- (18) 埼玉県神社庁神社調査団編 1992 『埼玉の神社 大里・北葛飾・比企』p.1412。伝承で「菅谷城」としているのは、『新編武蔵風土記稿』に「畠山重忠居城」とあることを受けたものかもしれない。
- (19) 菅谷は現在では比企郡内にある。「小袈郡菅屋」とあることから、史跡菅谷館跡の場所と異なる場所からの出陣と推察する方もおられよう。しかし、註14の安田著書をはじめ、郡の領域は時代によって変化していることを指摘し、この男袈郡菅屋は、現在の比企郡嵐山町菅谷であるとしている。

- (20) 福島正義 1990 『武蔵武士—そのロマンと栄光』さきたま出版
- (21) 『新編武蔵風土記稿』第10巻 雄山閣版 p.31
- (22) 日本農士学校・郷学研修所・安岡正篤記念館創立記念事業実行委員会編 2001 『菅谷之荘七十年史』財団法人郷学研修所・安岡正篤記念館
- (23) 渡 政和 1990・1991 「鎌倉時代の畠山氏について」(『研究紀要』第12・13号 埼玉県立歴史資料館)
- (24) 1925 『続群書類従』第19輯下 群書類従完成会 p.113、写本は国立公文書館などに収蔵されている。
- (25) 『梅花無尽蔵』では「須賀谷」と記している。一方、長享2年の翌年である延徳元年に上杉定正が作成した上杉定政書状写(『古証文』2所収・『新編埼玉県史 資料編5』1019号文書)の第24条では、「須賀谷原之合戦」とある。なお『北条記』(人物往来社判)では、「須賀原」とあるが、註で須賀谷原の誤としている。
- (26) 嵐山町遺跡調査会 2001 「嵐山町遺跡調査会報告11 須賀谷原遺跡」
- (27) 市木武雄編著 1993 『梅花無尽蔵注釈』1 続群書類従完成会
- (28) 作成年・編者不詳「北条記」巻第二所収 三 高見原合戦之事(萩原龍夫校注 1966 『第二期戦国史料叢書 1 北条資料集』新人物往来社 p.19)
- (29) 寛文10年(1670) 林 羅山・林 鷲峯(春齋)「本朝通鑑」(1918 『本朝通鑑』国書刊行会)。国立国会図書館蔵(1918-20)
- (30) 佐藤博信 2006 『中世東国 足利・北条氏の研究』岩田書院
- (31) 竹井英文 2007 「戦国前期東国の戦争と城郭 —「杉山城問題」に寄せて—」『千葉史学』51号。のち黒田基樹編 2014 『山内上杉氏』戎光祥出版に採録 pp.255-257)
- (32) 『神奈川県史』資料編所収6331号文書(雲頂庵文書)
- (33) ウィキペディア 長享の乱。この記載は、①峰岸純夫・片桐昭彦編 2005 『戦国武将合戦事典』吉川弘文館、②千野原靖方 2006 『関東戦国史(全)』崙書房出版、③佐脇栄智 1997 「第1部第1章 太田道灌謀殺と長享の大乱」『後北条氏と領国経営』吉川弘文館をもとにしている。
- (34) 『新編埼玉県史 資料編6』所収51号文書(佐竹文書)・『神奈川県史 資料編』所収6451号
- (35) (竹井英文 2007 「戦国前期東国の戦争と城郭 —「杉山城問題」に寄せて—」『千葉史学』51号。後に黒田基樹編 『山内上杉氏』戎光祥出版に採録 pp.255-257)
- (36) 峰岸純夫・川崎千鶴校訂 2011 『松陰私語』八木書店 pp.89-90
- (37) 埼玉県教育委員会編 1968 『埼玉の館城跡』埼玉県教育委員会。後1987年に国書刊行会により復刻。
- (38) 新田町誌編さん室 1984 『新田町誌』第四巻 特集号新田荘と新田氏
- (39) 高橋隆三編 1958~1967 『実隆公記』続群書類従完成会
- (40) 森田慎一 2014 『上杉顕定 古河公方との対立と関東の大乱』戎光祥出版 pp.94-95
- (41) 『神奈川県史』資料編3所収2520号文書(堀内文書)。黒田基樹編著『山内上杉氏』戎光祥出版 p.247
- (42) 埼玉県 1986 『新編埼玉県史』資料編8 中世4 記録2 p.744
- (43) 1990 『武蔵武士—そのロマンと栄光』さきたま出版会
- (44) 『戦国遺文 後北条氏編第三巻』東京堂出版 所収2450号文書
- (45) 毛利博物館蔵
- (46) 毛利博物館蔵
- (47) 陸軍士官学校 1900
- (48) 埼玉県 1979 『新編埼玉県史』資料編10 近世1・地誌 p.235
- (49) 国立公文書館蔵の原本に収録される図は、埼玉県嵐山史跡の博物館 2019 「嵐山史跡の博物館ガイドブック2 改訂版 国指定史跡比企城館跡群 菅谷館跡」p.4 参照。
- (50) 『武蔵国郡村誌』第六巻所収の菅谷村の項(p.320)によれば、東昌寺は、「(前略)古は長慶寺と称し、村の東方にありしを、寛文の初、今の地に移し東昌寺と改め、僧伊芳を以再興開山となす」とあり、長慶寺は、寛文年間(1661~1673年)の初めに、現在地(嵐山町菅谷9)に移り、寺名も代ったことが確認される。
- (51) 画像は、註2または、埼玉県嵐山史跡の博物館 2019 「嵐山史跡の博物館ガイドブック2 改訂版 国指定史跡比企城館跡群 菅谷館跡」p.6 参照。
- (52) 藤木久志 2005 『新版 雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』朝日新聞社 pp.169-171